

〔学会企画シンポジウムコメント〕

「ガヤ」回復への歩み

— 霧社事件研究の意味を考える —

下村作次郎

呉密察氏の報告にあるように、1930年10月27日に起こった霧社事件では、134人の日本人と、日本人と誤認された漢人2名の計136名が殺害された。その後、10月31日からはじまった日本側の軍隊・警察による鎮圧や報復によって、蜂起側にはおびたしい犠牲者が出た。鄧相揚氏の研究によると、当時、タックダヤの総人口は11社（当時の歴史的用語、今は「部落」と称する）^{プウルオ}2178人であったが、武装蜂起したのはそのうちの6社で、総人口は1236人であった。事件の発生から、指揮官のタダオ・モーナの自害（12月8日）までの40日余の戦闘で人口の約52%の644人が死亡した。そのうち、自殺者は296人に上った。霧社事件はこれで終わらなかった。半年後の1931年4月25日未明、ロードフとシーパウの2ヵ所に収容されていた蜂起側の514人中216人が、いわゆる「味方蕃」（「友蕃」）によって襲撃され、さらに多数の犠牲者が出た。これは日本側が報復のために唆したのである。その後、5月6日に、この時生き残った約102戸298人のうち、傷病者や介護者を除いた282人が川中島（現、清流）に強制移住させられた。さらに、霧社事件1周年前夜の10月15日、川中島では抗日の容疑で23人が逮捕された。彼らは翌年の3月までに逮捕監禁されたまま全員死亡した。こうして、事件発生後、蜂起側の8割近い人々が死亡し、生き残ったのはわずか259人であった。

従来の主として総督府の資史料に拠った歴史研究では、犠牲者への歴史想像はここまでであった。ところが、近年の口述歴史研究によってその後の犠牲者の実態が伝えられるようになった。ダックス・パワン氏は、「Kari Alang Nu Gluban（清流部落簡史）」（本誌に訳稿収録）の中で、「102戸の中で本来の家族構成を保っていた家は一軒もなかった。強制移住させられた最初の頃は、族人の中には、風土が合わず病気で亡くなる人、故郷や亡くなった身内を思い、あるいは自己の悲惨な境遇への憂憤のあまり自殺する者がいた。そのため日本統治時代の戸籍資料によると、1939年には清流部落は73戸203人に減少した。」と述べている。

パネリストのタクン・ワリス氏は、戦後の1952年に清流に生まれた。曾祖父バカハ・ポッコハはロードフ社頭目、祖父タクン・バカハは清流初代村長、モーナ・ルーダオの長男タダオ・モーナは曾祖父の妹婿、叔母ルビ・マホンはモーナ・ルーダオの娘マホン・モーナの養女である。母のウマ・ノカンダム建設のために日本側が中原に強制移住させたパーラン社の出身で、祖父ウカン・ナウイ¹は移住を拒み通したため、拘留されたあげく、獄死している。タクン氏の母方は、北村嘉恵氏が報告されたワリス・ブニを指導者とするパーラン社の勇者であった。

タクン氏はまた1971年に台湾大学法学部に入学した清流出身のエリートでもある。氏の台大入学がきっかけとなって、長く台大人類学科考古館に保存されていたモーナ・ルーダオの遺骸が、1973年に約40年振り霧社に帰ることになった。タクン氏は、今回の報告でその時の気持ちを、

「私をはじめ、自分の民族がたどった歴史を思って涙を流した。そしてこのとき、タブーを破り、60歳を過ぎていた祖父たちや老人たちに、霧社事件についての記憶をたずねて、セデック族の歴史を記録しようと決意した。」と述べている。

上記のように、タクン氏は戦後第一世代であるが、氏が育った時代の清流では、霧社事件世代（勇士として日本人と戦う。「余生（生残り）」を自称する人々。曾祖父母、祖父母の世代）、高砂義勇隊世代（日本兵として戦う。日本語教育を受けた人々。33人が高砂義勇隊に参加して12人が犠牲となった。両親の世代）、戦後中国語教育を受けた世代（国民党兵として兵役に就く。タクン氏は金門で従軍）の三世代が生活していた。

タクン氏が述べているごとく、清流では霧社事件はタブーであり、ほとんど語り継がれることがなかった。しかし、モーナ・ルーダオの遺骸の帰郷や近年の口述歴史による歴史の見直し、再構築の風潮の中で、タクン氏らは民族の「ガヤ」について改めてその意味と意義を省みて考察するようになった。タクン氏の今回の報告は、こうした中で霧社事件の遺族の後裔として、同時にセデックの知識人として、霧社事件とはなにかを私たちタナトゥヌ（日本人）に語るために書かれたものである。

タクン氏の報告の中心をなすのは「ガヤ」である。畢竟、「ガヤ」とはなにか。「ガヤ」の破壊はだれによってもたらされ、それはセデックにどのような影響を与えたのか。「ガヤ」とは、基本的には部落の頭目を中心とした民族の社会規範、生活規範であるが、タクン氏は、こうした「ガヤ」破壊の最たる要因を「和蕃結婚」にみている。1903年10月に発生した「姉妹が原事件」では、パーラン社の頭目の娘婿の近藤勝三郎の働きで、「百人あまりの勇士」が殺されたが、このような大量の殺害はセデックの「歴史にかつてなかったこと」だと述べている。そして、その内の「90%以上が、パーラン社の男たちだった。」（これは北村報告に関わる）大量の殺害はその後も続き、もともとタックダヤ11社で人口3000人以上であったものが、1912年には1600人余りになり、10年で半分近くに減少した。こうした中で、セデックの「ガヤ」は、猛スピードで、しかも徹底して破壊されていった。そのことをタクン氏はこう表現している。「われわれのガヤでは、出草はすべて部落の外で行ない、首を取ったら、さっさと戻って来る。それゆえ、なぜ日本の軍隊と警察が部落に攻め入り、村が減びてしまうほど多くの人を殺すのか、人々には理解できなかった」と。

いまセデックの人々は、「ガヤ」について考えている。百余年前に日本が侵入してきて以来、「ガヤ」は破壊され、またある時は都合よく利用され、民族は苛酷かつ残酷に敵味方に分断されていった。今日、霧社事件をめぐる評価においても、そのことが時にセデック内部で深く鋭利な痛みとなって激しく噴出する。実際のところいまとなっては、「ガヤ」の本当の在り方を知ることが、ある意味ではもはやほとんど不可能であり、多大な困難が伴う。しかし、セデックがセデックとして民族の誇りを回復し、新しいセデック像を創出していくには、どのような困難があろうと、民族の「ガヤ」を究明し、現代の生活に活かしていく道を求めていくほかない。今回、本シンポジウム「台湾原住民族にとっての霧社事件」で協力いただいたダックス氏は、「わが清流の子孫は、わが祖先がブガラの人々に対してドゥマフン〔贈り物を贈ること〕を行ったガヤを

回復し、それによって両部落の先祖たちのセデック／タイヤル（seediq／Tayan）精神に思いを致し、両部落の子孫の民族交流を発展させていくことが望まれる」と述べている。そして、タクン氏はいま、「われわれセデックの三つの方言グループは、日本人が去ってからは、かつて日本人に操られたために起きた不愉快な事件のことを忘れ去って、昔どおりに頻繁に通婚しており、手を携えて未来を創ろうとしている。私たちの今の民族の名前は『セデック族』である」と報告された。私たちは、これを受け止め、今後もセデックの人々と共に、霧社事件について考えつづけて行くことが求められるであろう。

注

- 1 簡鴻模「Tgdaya 的起源、遷徙與重大歴史事件」（『中原生命部落史』永望文化、2003年）42頁参照。

